



## 授業づくりの「読み・書き・算盤」

浜中町立茶内小学校長 富田直樹

校長の仕事の中で、最も大切な仕事の一つに、日常の授業参観と、参観した授業へのフィードバックがあります。2学期が始まり4週目に入り、そろそろ1ヶ月になろうとしています。学校経営の理念として掲げた『子どもを育てる学校』から『子どもが育つ学校』への実現に向けて、各教室では、「子どもが主語の授業づくり」への模索が続いています。そんな教員の皆さんの頑張りを、日々の授業参観を通して見ていたら、数年前に目にした総合初等教育研究所参与の北俊夫氏が著した文を思い出しました。保護者や地域の皆さんにも紹介します。

民俗学者の柳田國男は、生きていく上で大事なことを「新聞が読めて、手紙が書けて、買い物ができること」だと言った。日頃から授業研究に携わっていると、人生の「読み・書き・算盤」をつい授業づくりと結び付けてしまう。



「読む」とは一般に文章を朗読したり、理解したりすることを言う。教師は、子どもが教材にどのように関わり、どのように応答してくるかを読みながら指導計画を作成する。授業中には、子どもの表情や心の変化を読み取りながら、授業を展開する。いずれも、子どもの心を読むところに共通性がある。ここでは、教師に観察力と洞察力、それに子どもを理解する力が求められる。



「書く」とは文字や文書を表記すること。授業者にとって重要な書く作業は、事前に指導計画を作成すること、授業の様態を記録に残すことである。書くためには授業の構造力や構成力のほか、教材研究が欠かせない。書くことによって、授業の姿が可視化され、同僚とも共有化できる。

板書は授業者の重要な仕事。板書を見れば授業が分かると言われる。板書はもう一つの教材。板書の機能をどう発揮させるか、教師の書く力に懸かっている。子どもにも思考を促し理解を深めさせるよう、構造的に板書する力を身に付けたい。



「算盤」とは計算すること。計算には見積もるとか予測しておくという意味もある。授業における計算とは、囲碁や将棋のように先を想定して布石を打ち、今、実践することを考えることだ。こう発問すると、子どもはこう答えてくるだろう。次にこうする。そして、この方向にもっていく。計算し尽くされた授業は、授業者の意図の下に、子どもを読む行為と一体に展開されていく。

「読み・書き・算盤」は、授業づくりの基礎・基本に通じる。柳田國男になぞると、「子どもの心を読めて、授業計画が書け、授業の先が計算できること」となる。3つの基礎・基本を授業力向上策として身に付けたい。

「子どもの心を読めて、指導計画が書け、授業の先が計算できる力」、これは教員である以上、永遠に追求していくべき資質・能力だと考えます。この資質・能力の獲得を目指して日々奮闘する教員のために何ができるのか。そのことを考えながら、校長としての資質・能力（教員の心を読めて、教員を育成するビジョンが描け、そのビジョンの実現に向け具体的な戦略を講じる力）を磨いていく努力を重ねていく必要があるのだと思います。